

少年の死

豊島与志雄

青空文庫

十一月のはじめ夜遅く馬喰町の附近で、電車に触れて惨死した少年があつた。それが小石川白山に住む大工金次郎のうちの小僧庄吉だと分つたのは、事變の二日後であつた。惨死はこの少年の手ではどうすることも出来ない運命の働きであつたらしい。

庄吉は巢鴨の町外れの小百姓の家に生れて育つた。三つの時に母を失い、九つで父に死なれたので、彼はその時から父の遠縁に当る金次郎の家に引取られた。

金次郎の家は極めて貧しい其日暮しであつたので、庄吉は其処そこに引取られてからは小学校も止してしまつた。そして特別な金次郎の計いで年期にも上らないで、よく彼に連れられて棟梁の大だいと

留^めの仕事場に行つて大工の見習をし、または家で使歩きをした。

彼は何も分らないでよく働いた。そしてよく眠つた。毎朝金次郎の妻のおせいは彼を揺り起すのに眉を顰めた。

「どうしてこう寝坊だらうね、肥桶こえたごのくせに。凶々しいつたらありやしない。」と彼女はよくいった。

「肥桶こえたご」というのがいつしか家での彼の異名となつていた。

「肥桶こえたご起きろよ！」と長男の堅吉がよく怒鳴つた。

然し庄吉は二三度起される迄は床から出なかつた。金次郎夫婦とその二人の子供と一家四人枕を並べて寝る六畳の隣りの格子先の四畳半に彼は寝かされた。枕頭の煤けた櫺子窓からほの白い夜明けの光りが射込むのを見ながら、うとうととして表を通る人の

足音や車の音を聞いているのが、彼には一番快い時間であつた。彼はよく櫺子窓の先の蜘蛛の巣を払い落した。それから毎朝表の足音や車の音をききながら、新聞屋だろうかとか牛乳屋だろうかとか考へた。それは實際巢鴨の場末の田舎に居た「肥桶こえたづ」の嘗て知らない楽しみであつた。人生の珍らしさと労働の健かさが彼の心に夜明けと共に忍びこんで来るのであつた。

「庄吉の野郎毎朝眼が覚めてるのに起きないんだよ。」とおせいは夫にいった。「凶々しいつたらありやあしない。お前さんが黙つてるからつけ上るんだよ。少ししつけ騒しつけをしてやらなくちや困るじやないかね。」

金さんはただ首肯うなずくばかりであつた。彼は棟梁の仕事場から帰

つてくると毎晩酒を飲んで、そのまま畳の上に寝転んで鼾を聞いた。それを庄吉は蒲団の中に入れてやらなければならなかった。

「小父さん、小父さん！ 寝るんだよ。」そういつて庄吉は彼の頭を持ち上げた。

小父さんは薄眼を開いて庄吉の顔を見た。それから「うむよし。」といつて床の中にはいつた。彼の横には堅吉と繁しげるとがもう眠っていた。

それから庄吉は小母おぼさんの側で糊をして内職の封筒をはった。彼が眠むそうな眼をしばたたいしていると、小母さんはよく斯んなことをいつた。

「もつとしつかりおしよ、何だよ眠そうな眼をして。お前さんは

もう十歳とおにもなるんだからちつとは稼ぐ事も覚えなくちやいけな
いじゃないかね。お前さんのためには私達どんなに苦勞してるか
知れないよ。特別に大留だいとめさんをお願いして年季にも上げないで
さ、うちから仕事場に通えるようにしてあげてるんじゃないかね。
私達にだって子供があるしね、並大抵じゃないよ。」

庄吉は黙つてまた仕事の手を早めた。然し心のうちでは年季に
上つた方がいいと思つた。

大留のうちには少年の心をそそるようなものがいくらも在つた。
新しい木材の香かや鑿の音も彼の心を動かした。面白い音を出す柱
時計やぴかぴか光っている道具類や棟梁の大きな銀の煙管なども
彼の心を引いた。そして其処には彼を「肥桶こえたづ」と呼ぶ人も無か

った。皆が快活に勇ましく働いていた。

彼は其処で鑿と鋸とを持つことを教わった。手斧ちようなや鉋は中々許されなかった。然し彼は仕事に少年としては意外の伶俐さを示した。そして自分でも、他人の手に成った螺鑽おおぎりの穴を辿つて角材に鑿を入れることがもの足りなかった。彼はともすると小父さんの螺鑽をいじつてみたくなった。

棟梁は螺鑽を持つている彼の姿を見て微笑んだ。

「今少し辛抱しなくちやいけない。今に一人前にしてやるから。これで鑽きりを使うことは中々難しいんだ。頭が歪ねじけないでしつかりしていないと鑽は真直はいに入らないものだ。性根を真直にすることが第一だ。」

庄吉にはその意味がよく分らなかつたけれど、常々の棟梁の言葉からして、道具を使うのも単に使うだけでないことが臆ろげに呑込めていた。そして頭領は何かしら偉いものを持っているように思えてきた。皆の者がいつも黙つてその云うことを聞いているのが、本当だと云う気がしてきた。

何時か庄吉も一度棟上げむねあに連れて行つて貰つたことがあつた。

大留だいとめの下についてる大工達の外に多くの仕事師達もやつて来た。まだ新鮮な香りのする白木の桁構えのうちには、健やかな気分が漲つていた。頭かしらが上にあがつて音頭おんどを取つた、そして大勢の衆の木遣りの唄うたにつれて棟木がゆるゆると上に引き上げられた。庄吉は勇ましい頭かしらの姿を見た、それから御幣ごへいと扇と五色の布とがつけ

である大黒柱の神々しきを見た、そしてまた革のしるしばんてん印絆纏を着て少し傍に離れて立っている棟梁とくりようの鹿爪らしい顔を見た。新しい印絆纏を着せて貰ったことよりもそれらのものが一層庄吉の心を引立たした。

庄吉は棟梁の側に行つてからこう云つた。

「親方……。」

「何だい？」と答えて棟梁は庄吉の顔を見返したが、庄吉が其儘下を向いて了つたので唯ほほえん微笑みでみせた。

然しまた棟梁のことを何かと影口をきく者もないでもなかつた。大留のうちには惣吉に専太という二人の年季奉公の小僧が居た。で庄吉は自然に彼等の方に親しんで行つた。特に金さんが得意先

に出かけて行った時や、何かにつけがみがみ叱りつける彦さんが居ない時など、彼は小僧達と一緒にこつそり薩摩芋を買って食べたりした。お小遣銭こづかいを持たない庄吉がいつも買いに走らせられた。「うちの親方はぐずなんだい。」と惣吉はよくいった。「こないだの坂の上の旦那の家の建増しを大万だいまんの方に取られちゃったじやねえか。働きが足りねえんだよ。俺が親方位になりやあ、区内の仕事は一人で立派に引受けて見せてやるんだがな。」

「だが親方は偉えらいんだい。」と庄吉はいった。

「偉いのは偉いさ。ただ働きが足りねえんだよ。」

庄吉にはその意味がはつきり分らなかつた。惣吉は得意そうにこんなことをいい出した。

「こないだね、親方が例の処へ行つて朝遅く帰つて来たもんだから、お主婦かみさんに小言を喰つて喧嘩をおつぱじめたんだ。だが後でお主婦さんにあやまつていたよ。甘えあめんだな。」

庄吉は妙に反抗したいような気が起つたが、別に何とも答えな
いで専太の方をじろりと見た。専太はにやにや笑つて惣吉の話を
きいていた。一体専太は始終休みなしによく働くばかりの小僧だ
つたが、いつもにこにこしてるのみで口数の少ない少年だった。
それに反して惣吉は横着な影日向をする少年だった。そしていつ
もお主婦さんの機嫌ばかり取つてることが庄吉にも分つていた。
お主婦さんから時々、内証でお小遣を貰うことを庄吉も聞かされ
たことがあつた。「俺は働きがあるんだい。専太の野郎とは異ちがう

んだからな。」と彼は云った。「惣吉や。」とお主婦かみさんは呼んだ。そして彼はよく昼過ぎのお茶受けを買いにやらされていた。

然し庄吉は何だかお主婦なさんに昵めなかつた。

「お前年季に上りたいんじゃないのかい。」といつかお主婦さんは彼の眼の中を覗き込むようにして尋ねたことがあつた。「私もそれがいいと思うんだがね。……然し小母おぼさんは随分のしつかり者らしいね。何かつらいことがありはしないかい。あつたらそうお云い、私が悪いようにはしないから。でももう暫く辛抱するんだね。そのうちにどうにかしてあげるよ。うちの親方もお前には見込があると云っているんだからね。」

庄吉はそう云われたことが嬉しいよりも寧ろ何となく恐ろしく

思えたのであった。自分の未来のことを考えると、触れてならな
いものに触れたような恐しさが後で萌した。そして大留だいとめのうち
にも種々な術策が方々で行なわれていることが漠然と彼の頭はいに入
って、それが一層彼の心を臆病ならしめた。

或日の夕方大留の仕事場から帰って来て台所口の方に廻ろうと
すると、その日先に帰った金さんがおせいと何やら声高に話して
いる声はいがして、庄吉という言葉がふと彼の耳に入はいった。

「大留だいとめさんが見込がありそうだといいんだ。」

「そんなことが子供のうちから分るもんかね。」

「いや兎に角器用なんだ。今までに一度だつて怪我もしなかつた
じゃねえか。」

「何をいうんだよ、お前さんは。怪我でもされて高い薬代を取られた日にはかなわないじゃないかね。」

「まあそれもそうだが、大抵の者あ怪我の一二度はするものさ。

……兎に角大留だいとめさんは多少見所がありそうだから年季に上げたらどうだというんだ。それにお主婦かみさんが中々執心らしいんだ。」

「なにあのお主婦さん古狸だから何をいうか分りやあしないよ。

それに年季に上げたらお給金は貰えないし、手斧ちようなを使うようになつて怪我でもしてごらん、うちで黙つて見てもおれないじゃないかね。も少ししたら私はどつかの店に小僧にでもやったらと思つてるんだよ。うちにも堅吉が居るんだし、あれの方を学校がすんだら年季に上げたいんだよ。」

「それもいいだろう。」

「お前さんはいつもそれだからいけないんだよ。いつもどうでもいいだろうと来るんだものね。お前さんがしつかりしてくれなくちや困るじゃないか。どうしてそう愚^{ぐず}図^ずなんだろうね。お酒ばかり喰^{くら}つてき……。」

裏口に身を寄せてきいていた庄吉は、そこでそつと足音を盗んで表に出た。外にはまだ暮れ悩んだ薄明るみが湛^たえていて、空には淋しい星が一つ二つ輝いていた。

庄吉は暫くの間通りを歩き廻った。小さな家の立ち並んだ狭い裏通りには、一日の労苦を終えた人々の安らかな家庭の団^{だん}欒^{らん}の気がこもっていた。その中で庄吉は広い社会のうちにぽつりと置

かれた自分の小さな運命を漠然と心に浮べたりした。

庄吉は淋しい心でうちに帰った。

「何を愚図々々していたんだい。こんなに遅くまで。」と小母さんは怒鳴った。

「親方のうちに用があつたから。」

「どうだか分るものかね。大方活動の前にもぼんやり立っていたんだらう。仕様のない餓鬼だね。早く御飯でもおあがりよ。」

庄吉は一人ひとりで食くいちらされた餉ちやぶだい台に向つた。

その晩彼は封筒はりをしながら、死んだ父のことを思い出し、りした。然し別にそれも懐しいものでもなかつた。ともするとしつかりした大留の顔がそれを消して彼の心に浮んできた。

毎朝庄吉は八時頃弁当を持って大留の仕事場に通った。そして夕方家に帰って来た。小父さんと一緒の時も、又そうでない時もあつた。そして幾らかの心附けの金が彼の為に小父さんの手に渡された。

庄吉は夕方一人で少し早めに帰るのが一番嬉しかった。一寸廻り道をして活動の看板を見に行くこともあつた。また華やかな商店の窓を覗いてまわることもあつた。然し彼が一番嬉しかったのは家の向うのみよちゃんに逢うことであつた。漸くお垂さげ髪にしたばかりの愛くるしい顔が彼の頭にはつきり刻まれていた。

仕事場に通わなかつた或日庄吉は、堅吉や繁やまた近所の子供等が集まってみよちゃんの護謨毬で遊んでいるのを、側に立つて

見ていたことがあつた。みよちゃんはいつも種々な玩具おもちゃを持つていてそれを皆に貸すのであつた。其日誰かが投げた毬は、ころころと転ころがつて池田さんの板塀の中に入はいつた。板塀の下の方は棧が二つしてあつてすいていたので、毬は外からよく見えた。

皆が代る交がわる手を差し出したが届たかなかつた。

庄吉はそれを見ると、自分で進んでいって「俺が取つてやる。」と云つた。

大勢の子供達は只黙つて眼を見合つた。

庄吉は腹這いになつて棧の下に身を入れた。そしてずんずん入はいつて行つて、漸く足先ばかりが塀から覗いた位になつて毬に手が届いた。で、片手に毬を持って出ようとすると堅吉が彼の足の上

に腰掛けた。

「みんな腰掛けてみる、いい腰掛だあ。」

それで皆がどつと笑った。

庄吉は棧の下に身体を押されて身動きが出来なかつた。「覚え
てろ！」と彼は叫んだ。そして片手に土塊つちくれを掴んで投げつけた。
子供達は逃げていった。そして向うの隅から「肥桶こえたごやあーい」
と声を合した。

庄吉は真赤な顔をして立ち上つた。すると其処にみよちゃんが
一人立っているのを見た。彼は黙って護謨毬を彼女の手に渡した。

みよちゃんは黙って彼の顔を見上げたが、「ありがとうよ。」

と大人ぶつた口を利いて、そのままばたばたと家の方へ駆けて行

った。

妙な喜びと悲しみが庄吉の胸の中に乱れた。それでも彼は自分のうちにまた或る悲痛な力を感じたのであった。

その晩庄吉は小母さんからひどく叱られた。

「お前さんは今日泥棒の真似まねをしたってね。へんさすが生れだけあつて違つた者だね。だが私の家に居る間はそんな真似は止よしておくれよ。此度またしたらもう家に置きやあしないからそう思つといで。碌でなしの癖に悪いことばかり覚えやがって、私達の顔にもかかわるんだよ。」

庄吉は横目でちらと見やると、堅吉は片隅に何知らぬ顔して坐つていた。

然しそれでも、庄吉はその時から特にみよちゃんが好きになつた。夕方など彼女が他の友達と遊んでいる時、彼はよく物影から顔だけ出して彼女の方を見ていた。自分の身体を物影に潜めることもいつしか彼に或る不思議な喜びを与えるようになっていた。そうした庄吉の姿を見出すと、みよちゃんはいつも急いで逃げて行つた。

彼女が逃げてゆくと、庄吉は急に我に返つたような気持ちを覺えた。自分の身体を潜める神秘的な楽しみが急に何処どこかに消散してしまつて、みよちゃんが逃げてしまつた後の淋しい気持ちが彼に明かに感じられて来た。

然し彼はまた、いつか小父さん夫婦の話を立聞した頃から、次

第に立聞きの癖がついた。大留だいとめの仕事場でも、どうかすると彼は物影から人の話や素振りに注意するようになった。物事の裏面が彼の心を不思議に誘惑した。そして彼は自ら知らないで、其処に自分の小さな運命を隲ろげに見守っていた。彼は一種の不安な恐ろしさと或る神秘的喜びとを心に感じた。

その年夏に入ると殆んど毎日のように雨が続いた。そして秋に入っても雨は止まなかった。たまに二三日晴天があるかと思うと、それも多くは半日は曇天かなんかであった。

この雨のために方々で非常な打撃を蒙った。大留の方もその数に洩れなかった。戸外の仕事は殆んど出来なかったからである。外廻りの仕事に行った人達は幾度も雨に妨げられて空しく帰って

来た。また雨を氣遣つて普請を延ばす人も多かつた。それで仕事場の方の用も少なくなつた。

「ほんとに仕様がなない天氣だなあ。」とお主婦さんは口癖のよう
に云つた。

「なに一年中も続く雨じゃあるまいし、そのうちに霽あがるだろうよ
。」

大留さんはそう云つて平氣な顔をしていた。

然し仕事場の方は少しずつ人数が減へつていった。倉さんや常さんなどは殆んど顔を見せなかつた。そして金さんはその頃から暫くの予定で砲兵工廠に出るようになった。

庄吉は相変らず大留の仕事場に通つていた。それは、金次郎が

また造兵の方を止めて大留の世話になる時のためと、堅吉が来年の春小学校四年を終えて大留に年季に上る時とのために、大留の機嫌を損じないようにというおせいの算段からであった。何れは商店の小僧にやられるのだということが庄吉にも呑込めてきた。

庄吉はよく外に佇たたずんで、家の中の話を立聞きした。

或日の夕方彼はまたそつと自分の家の裏口に忍び寄った。中はいつもと違って妙にひっそりとしていた。「何かあつたに違いない」と彼は思った。長い間立っていたが何の物音もしないので、彼は我を忘れてそつと台所口から覗こうとした。妙な好奇心が露あらわに彼の胸を躍らした。

その時急に彼の肩口を掴つかんだ者があつた。ふり返るとおせいで

あつた。彼女は顔をてかてかさして手に石鹼箱しゃばんぼこを下げていた。

庄吉は無言のまま家の中に引きずり込まれた。

「何をしていたんだい。さあお云い。」と小母おぼさんは怒鳴つた。

「何を凶々しく黙っているんだい。云わなけりやあ、こうしてやる。」といつて彼女は庄吉の右手をぐんぐん振じ上げた。「大方何か物を持ち出そうとでも思つたんだらう。へんお前さんにそんなことをされるような間抜けじやないよ。」

庄吉は痛さにしくしく泣き出しながらいつた。

「小母おぼさん堪忍しておくれよ。誰もいないんで俺は恐こわくなつたんだい。それで中を覗いてみたんだい。」

「よくそんな白々しい嘘うそがつけたもんだね。私にはちやんと分つ

てるよ。小父さんに頼まれて何か持ち出すつもりだったんだろう。小父さんにそう云うがいいや、私あそんな間抜けとは違うからね。」

庄吉は何と弁解しても許されなかった。そしてその晩御飯も食べさせられないで、しくしく泣きながら冷たい床の中に入はいった。

おせいおせいは金さんが造兵から帰ると、訳も云わないでぶんぶん怒っていた。

「造兵あまの女あまつちよの処へ行つちまうがいいや、飲んだくれの間抜けまっぴらなんか私は真平まっぴらだよ。」

「何を云うんだい、馬鹿野郎。」と金さんも怒鳴った。

「へん私はどうせ馬鹿だろうさ。」

金さんは自分で立つて行つて、台所で冷酒をコップで煽あおつた。

金さんが造兵に出る様になつてからそういう喧嘩は珍らしくなかつた。又實際、夜勤の方に廻る様になると、其処に入り込んでゐる怪しい女にひつかかることもよくあるらしかつた。朝彼は酒ぐさい息をしてよく歸つて来た。そんな時は屹度、四時頃彼がまた夜勤に出かける時一騒動はたが起るのであつた。

庄吉はそんなことを傍はたからじつと見ていた。そして彼の心に映ずる世間も次第に複雑になつていった。

大留の仕事場でも彼は物影から種々な話をきいた。彦さんと音さんはよく棟梁の居ない時なんか面白い話をして笑い合つていた。「れこ」とか「張る」とか「なか」とかいう言葉がよく彼等の口

から洩れた。

庄吉はいつしかそれらの言葉の意味を覚えてしまった。

「おい庄吉、」と小僧の惣吉は呼びかけた。「お前の小父おじさんの妹はお女郎だそうだい。親方がちよいちよい寄ることがあるんだとよ。」

そういつて彼は妙な薄ら笑いをした。

然し庄吉はまた、大留の遊びを余り深入りさせないために惣吉は内々お主婦かみさんから大留につけられているのだ、ということをも知っていた。

そのお女郎という金次郎の妹が一度家に帰って来たことがあつた、大きい鬘に結って白く鉛白をつけ、柔いものを着て草履をは

いていた。庄吉が大留の仕事場から帰った時は、もう皆で酒を飲んでいた。そしてその晩は金さんも飲めるだけ酒を飲ませられた。庄吉は唇に杯を持ってゆくその女の少し下品な険のある横顔を眺めていた。

「お前さん大変^{りこ}怜悧だつてね。」と彼女は庄吉の方を向いて云つた。

「なにね、悪いことばかりに賢くくて始末に終えないのさ。」と小母^{おぼ}さんは遠慮もなく云つてのけた。

「それはね子供のうちはどうせ悪^{いたずら}戯ばかりしたがるもんですよ。でも屹度いい大工になるでしょうよ。棟梁もそう云つていましたよ。」

「あらお前さん棟梁に逢つたの？」と小母さんは不思議そうに眼を丸くした。

「いえね。」と云つて彼女は一寸言葉を切つたが、「こないだ一寸お寄りなしたから。」

「あそこへかい。」

「ええそうよ。」

小母^{おば}さんはじつと彼女の顔を窺っていたが、それから金さんの方をじろりと見た。

「俺も少しお前の処へ遊びに行くかな。」と金さんは云つた。

「まさか振るようなこともあるまいね。」

「あらいやだね、兄さんは。」と云つて彼女は蓮っぱな笑いを洩

らした。

金さんはもうすっかり酔っていた。そしていつしか畳の上にごろりと横になって、鼻をかき出した。

「これだから困るのよ。」

「そうね。」と彼女も云った。

それから小母さんは、金さんが酒ばかり飲んで困ることや、家の中の経済の困難なことなどをくどくどと彼女に訴えていた。然し造兵の女のことや庄吉の未来のことなどに就いては一言も云わなかった。

その晩庄吉は、表の四畳半にその妹さんと床を並べてねたのが一番嬉しかった。

「お前さん寝坊だつてね。あたしもそうなんだよ。あした遅くまで寝坊くらべをしようね」

と彼女は床の中で云つた。

然しその翌朝庄吉は常よりも早く起き上つて何やかや用をした。仕事場に出かけるのが一番いやだった。

金さんの妹は庄吉を物影に呼んだ、そして五十錢銀貨を一枚くれた。

「黙だまつておいでよ、ね。そして辛抱して働くんだよ。親方にも私からよく云つておいてあげるから。」

「親方はよく姉さん所へ行くの？」

「ああよくおいでなのよ。」

庄吉はその日銀貨を大事そうに帯にくるんで仕事場に行った。

時々大^だ留^{いとめ}さんから手間賃に貰った金はみんなそのまま小母さんに渡してしまつて、彼は一文も小遣を貰わないのであつた。そして繁などは「かあちゃん、一銭おくれよ。」といつては叱られながらもその金を自由に使つてゐることが、彼にはいまいまいしかつた。然しその日は、もうそんなことはどうでもいいような気がした。

「おい今日は俺が奢^{おご}るよ。」と庄吉は其日お茶の時に密^{そつ}と惣吉に云つた。「何でも好き^すな物を云えよ。」

「幾^{いく}許^く持^もてるんだい。」と惣吉は不思議そうな顔をした。「そんなら餡^{あん}麩^ぼを買つてこいよ。」

庄吉は十銭だけ餡麴麩を買つて来て皆で食べた。

金さんの妹が帰つて行くと庄吉は急に淋しさを覚えた。そして今迄知らなかつた強いお化粧の匂いがいつまでも彼の鼻に残つていた。彼はその頃から、道を歩くにもじつと人の顔を覗いて通つた。首を少し前につき出して、通る人の顔や懐の当りをじつと見てやるのが、何だか嬉しくてたまらなかつた。そつと覗き見らるるようなものが至る所にあつた。

聴覚と視覚とが鋭く庄吉に発達してきた。其処から一種の力が彼の心に湧いた。そしてその力が、或る神秘的な、運命とでもいったようなものに絡からみついていった。

庄吉は何気ない風をしながらそれでも耳を澄まして、大留の家

の中をあちこち歩き廻った。それからまたよく朝晩などみよちやんの姿を物影から貪るように覗き見た。然し彼が一番胸を躍らすのは、夕方、仕事場から帰って来て家に入る前に、一寸佇んで家の中の様子に耳を傾けることであつた。いつもまた新らしい話か自分に就いてなされているような気がした。そしてまた、何か新らしいことが一日の間に家に起つていそうな気がした。

然し小母おばさんの方でもいつのまにか庄吉のこの癖に感づいていた。彼が帰つて来そうな時はなるべく話をしないようにした。そしてまたよくそつと後から廻つて、庄吉の佇んでいるのを捉えた。その度毎に彼女は庄吉を打つたりまたは足蹴あしげにしたりした。

「もうこれからしないから堪忍しておくれよ。」と庄吉は泣き乍

ら云った。

「うるさいや。何度同じことを云うんだい。さつさと家を出てゆくがいい。お前のような者はうちには置けないんだよ。出ておいで。いい泥棒になるだろうよ。」

それでも小母さんは彼を追い出すでもなかった。

「屹度庄吉の後ろうしろには誰かついてるよ。」と彼女は或る時金さんにいった。「私にはちやんと分ってるんだよ。ほんとに油断すきもありません。あしあしない。……私達の話をみんなきいて行ってしまっただよ。お銭あしにつられたんだね。」

おせいかみはもうその頃は、金さんよりも棟梁のお主婦かみさんに目星をつけていた。

おせいと庄吉との暗黙の争いは次第に激しくなつていった。庄吉は見出さるる度毎に甚く苛められ乍ら、それが却つて彼の立聞きの好奇心を煽つた。彼の身体にはよく紫色に腫上つた傷跡がついた。

家の中に居る時も、庄吉はよく小母さんの方をちらりと横目で見つた。小母さんも彼の方をじろりと見返した。

庄吉はいつしか新しい隠れ場所を見出した。家は南に通りがあつて西向きに建てられていた。そして通りから奥に勝手と便所とが並んで在つた。便所の方は隣家の垣根に接して、その間に僅かに身を入れる位の余地があつた。水道の共同栓の広場から木戸があつて其処に通じていた。庄吉は隣家の裏口を廻つて、いつも

締りがしてないその木戸を押しして中に入^{はい}った。そして便所の側に蹲^{しゃが}んだ。其処から家の中の話がよく聞えた。そしてまたその狭い空地をすかして表の通りの方も覗かれた。

庄吉は屢々長い間其処に身を潜めた。人しれぬ小さな穴から、世間の裏を覗いてるような、また自分の運命を見守っているような好奇心な楽しみが、彼の心を唆^{そそ}った。

庄吉は其処から、みよちゃんの小さな足先をじつと見ることもあつた。また家の中の話をきき取ることもあつた。

「庄吉はもうどうにかしなけりやいけないよ。」と小母さんはよく云つた。

「なに小僧じゃないか。」と金さんは云つた。

「小僧でいてあれだから恐ろしいんだよ。始しよ終ちゆう人の隙すきを狙つてるような眼附をしてるじゃないか。私もうあれを見ると身震いがするようだ。今のうちにどうかしないと、私達の方が負かされっちゃうよ。お前さんのような飲んだくれにはその時にならないけりやあ分らないのさ。だが私にはちやんと分つてるんだよ。」

圧吉はそんな話を影からききながら、「今に何事か起るぞ」というような気がして心のうちが緊張した。そうすると自分のうちにも力が湧いて来るように思えた。

彼は其処そこから忍び出て、何気ない風をして家に入はいった。

「何を今頃まで愚図々々していたんだい。」と小母さんは怒鳴つて、じろじろ彼の姿を眺めた。

「親分のうちに用があつたんだよ。」と庄吉は答えた。

「小母さんなんかどうにでもなる」と腹の中で庄吉は思った。然し妙に何かしら脅かされるような気持ち^{あたたか}を彼は常に感じた。

丁度十一月のはじめのいくらかまだ暖い日の夕方であつた。庄吉は例の隠れ場所に身を潜めた。家の中には誰か人が来ているらしい気配^{けはい}がして、いつもと違つて低い話声が洩れた。然し庄吉には何の話しか少しも聞き取れなかつた。ただ「庄吉」という自分の名だけが音の調子でそれと分つた。然し彼はそれが何か自分の身の上に重大な関係のあるものであることを直覺した。話声はひそひそと長く続いた。そして客は中々帰りそうにもなかつた。

物影には夕暮の闇がしつとりと纏つていた。そして庄吉はその

夕闇の中に、獲物を狙う獣のようにじつと家の中を窺っていた。緊張した時間が静に過ぎ去って行った。

やがて客の帰る音がした。「うまくゆきそうだ」という小母さんの声がした、それからまたよくきき取れぬ金さんの声がした。それから後はひっそりと静まり返った。

庄吉はもういい頃と思つて其処に立ち上つた。そして木戸から共同水道栓の所へ出ようとした時小母さんが家の裏口から突然姿を現わした。庄吉は其処に立ち^{すく}悚んでしまった。

小母^{おぼ}さんは夕^{ゆうやみ}闇をすかして庄吉の姿をじつと見守つた。それから物も云わないで彼の首筋を捉えてぐんぐん家の中に引きずり込んだ。そして庄吉を其処につき倒して、足で蹴り続けた。暫く

は憤怒に声も出ないらしかった。

「何処どこにいたんだい！」と小母さんはそれだけ云った。庄吉は彼女の眼をつり上げて赤い顔をした凄じい形相ぎようそうを見た。

「さあ今日はみんな云わしてやる。」と云って小母さんは息をついた。「お前誰に頼まれて私達の話をかぎつけようとしてるんだい。今日ばかりはもう白状しないとこのままには置かないから、そう思うがいい。」

「俺は何も知らないんだい。もう之からしないからよう……。」と庄吉は泣声を立てた。

「何だと、まだ凶々しい口を利きやがって……。」

金さんは酒に酔っぱらってどろんとした眼でじっと見ていた。

堅吉と繁とは片隅に小さくなつて坐つていた。緊張した時間が一瞬間続いた。

小母さんはいきなり火鉢から沸立っている鉄瓶を取り上げた。

「この餓鬼野郎いわなけりやあこうしてやるぞ。」

熱湯が一滴庄吉の首筋に垂らされた。庄吉は心臓の底までびくりと震えた。

再び熱湯が垂らされようとする時、庄吉はがばとはね起きた。そしていきなり鉄瓶を小母さんの顔に叩きつけてやった。

あッ！ といつて小母さんは倒れた。

「何だ？」と金さんも立ち上つた。

庄吉は身を交わして裏口から走り出た。

庄吉はただむやみと駆け続けた。赤い灯がちらちらと彼の眼に映じた。そしてそれが益々彼の心を向うへ向うへと追い立てた。然しいつしか彼は呼吸が苦しくなり足が疲れて、今にも倒れそうになった。立ち留ると誰も彼を追っかけて来る者もなかった。彼は夢を見てるような心地でぽかんと立っていた。

何時のまにか彼のまわりに大勢の人が集った。皆が遠くから彼をとりまいてじろじろとその姿を眺めた。それに気がつくと、彼は急にわあつと大きい声を立てて泣き出した。

「どうしたんだ？」と誰かが云った。

誰もそれに答える者はなかった。小さい囁きが人々の間に交わされた。

「何だ？ 何だ？」と云つて職人体の人が中に入って来た。「どうしたんだ？」

その男は何の答えもないので、ぐるりと群集を見廻した。それから庄吉の側に寄つていった。

「どうしたんだい。」

庄吉は何とも答えなかつた。

「泣いていたつて分らないじゃねえか。ほんとに仕様がねえなあ。……一体お前の家は何処だい。」

「白山。」と庄吉は低い声で答えた。

「白山だつて、なに遠かあないじゃねえか。どうしてこんな所に立つてるんだい。帰りな。さあ早く帰りなつたら。」

庄吉は泣き声を止めたが、それでもじつと立ったまま動かかなかつた。

「ほんとに仕様がねえなあ。」とその男は云つたままじつと庄吉の姿を眺めた。

「大方泥ちゃんでもやって追ん出されたんだろうよ。」と何処かの主婦かみさんが云つた。

それでまたまわりの群集のうちに方々で囁き声が出た。

そのすぐ前の炭屋から一人の男が出て来た。

「おいそんな所に立ってちや物騒でいけないじゃねえか。さあこれをやるから芋でも食って帰るがいい。……何だ下駄を手に下げているじゃねえか。下駄でもはきなよ。」

庄吉はその時まで片手に緊しかと下駄を握っていた。家を出る時、自分でも知らないで下駄を持って来たものと見える。

彼は黙っていわゆるままに下駄をはいた。そしてその男の差出した白銅を一枚手に取った。それからそのまま歩き出した。

大勢の者が彼の後からぞろぞろついて来たが、やがてそれも一人二人ずつ無くなつてしまった。庄吉は妙にぼんやりして歩いていたが、とある焼芋屋に入はいつて、貰った白銅で焼芋を買った。そしてその袋から三つばかり大きいのを手に取つて、残りは其処に捨ててしまった。お主婦かみさんはじろじろ彼の後姿を見送った。

庄吉は温い焼芋をかじりながら、歩いていった。それはまだ彼が一度も通つたことのない狭い裏通りであつた。通り過ぎる人が彼

の姿をじつと眺めていった。そのうちに冷たい雨がぽつりぽつりと落ちて来た。

彼は妙にぼんやりしていた。頭の中に何かが働きを止めたような気持であつた。明るい大通りを通つたり、うす暗い横町を通つたりした。そして小母さんの顔に沸き立った鉄瓶をぶつつけたことと、金さんが恐ろしい声をして立ち上つたこととを、きれぎれに思い出した。そして妙に心が何物かに脅かされてただむやみに歩くのを余儀なくされた。

「おいおい、」と云つて巡査に一度呼び留められた。

「何所へ行くんだ。」

「白山。」と彼は答えた。

「お前の家は何だ。」

その時庄吉の心に棟梁の顔が浮んだ。「大留^{だいとめ}」と彼はいった。

「大留と云うのは大工か。」

庄吉はもう何も答えないで、巡査の顔を見守った。

「よし早く行け。……白山はそっちじゃない。」

巡査は彼が道に迷ったとでも思ったのか、右へ行つて左へ行つて何処を曲るんだというように委しく白山への途筋を教えてくださいました。

然し庄吉は教えられた方へは行かなかつた。彼は少しでも土地の低い方へ低い方へと歩いて行つた。丁度低きにつく水の流るるようなものであつた。彼はただ低い方へ流れていった。そして街^ま

路ちを通る人達は皆彼と反対の方向へ行く者のように彼には思えた。雨の中を、傘をさして通る人々の冷たい無関心な眼附の中を、そしてちらちら光る軒燈の中を、彼は一人歩いていった。

とある軒先に佇んでいる真白に鉛おしろい白をつけた女をふと庄吉は見た。そして一度逢った金さんの妹の事を思い出した。どうやら横顔が似てる様にも思えてきた。彼は立留つて、じつと其姿を見守つた。

「何だよお前さんは？」と女は云つた。そして暫く庄吉の姿を見廻わした。「まあ頭から濡れてるじゃないの。こつちにお入はいりよ、火に当らしてあげるから。」

女は庄吉を家の方へまねいたが、その時庄吉は急に何だか恐ろ

しくなつて駈け出した。

それから庄吉は殆んど夢中であつた。彼は高いライオンの広こうこ告塔くとうを見た。黒く濁つた掘割の水を見た。そして頭から冷たい雨に濡れて、手足の先が麻痺していた。それでも彼はなお低い方へと歩いていった。

庄吉はぱつと明るいものに眼が眩むように覺えた。何だか黒い影が彼の心から逃げて行つた。或る大きいものが彼の上で羽搏はばたきをした。そして彼は擾乱と熱火とのうちに巻き込まれた。それから最後に冷たいものを全身に感じた。

彼は疾走してくる電車に触れたのであつた。電車は留まる間もなく、一二間彼を救助網につっかけて走つたが、遂に車輪の下に

彼を轢いた。

もう夜遅くであつた。脳味噌を露出し片腕を断ち切られた彼の身体が、無惨に地面の上に横つていた。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第一卷（小説）「#」「1」はローマ数字、1-13-21）」未来社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「新潮」

1916（大正5）年12月

入力：tatsuki

校正：松永正敏

2008年10月14日作成

2008年10月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少年の死

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>